

---

# 木野悠斗の日常

竹矢ユウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

木野悠斗の日常

### 【Nコード】

N4653N

### 【作者名】

竹矢ユウ

### 【あらすじ】

自分で『普通』と自負する少年、木野悠斗。しかし彼は普通だけど普通じゃない？根暗少女との友情や、学校のアイドル的存在、転校生までもを手駒にとる少年の学園系ラブコメ。

活動報告を一度、ご一読をお願いします。

## 図書室にて

始めまして。俺の名前は木野悠斗。何てことは無いただの高校二年生。

趣味はネットと料理。……それ以外は特に成績は俺が高校一年の時の成績は三が主軸でちょこつと

四があるだけ。両親は健在。

……なあ？ 普通だろ？ 比較的目立つても無いし不良でもない。『平凡』この二文字に関する言葉に俺が当てはまっているといい。

まさに『サラリーマン』的ポジションにいるのが俺だ。まあ『イケてないグループ』に俗しているが、友達が全く居ない連中よりはマシだろう。

別に普通が嫌だー、リア充が良いな……とかも中学生の時はそりゃ思ってたよ？

でも今は、そんな感性が無くなったのか『普通』というのが固定概念として俺の胸の中にある。

安定したポジションが自分自身好きなんだな、きつと。

「だからさ、俺も彼女を作ろうとか思う訳よ……。って聞いているか悠斗？」

名前を呼ばれて重い頭を熱心に話す親友の吉河建よしかわけんへと向ける。

そうだ、今は昼休みなんだっけな。つい俺の意識は教室から何処か行ってしまうていた。

「ああすまん……聞いてなかった。とりあえず建、ご飯やハンバーグなどの噛み砕いた口の中を

飲み込んでから先程の話の続きをしてくれないか」

「あーすまんすまん」

そう謝った後、建は口に含む食べ物飲み込んだ後先程話題を話し始める。

「だからさ……悠斗よ？ 俺達もさ、可愛い彼女を作って『リア充』の仲間入りしたいってわけよ」

「……別に可愛くなくてもいいだろ。俺達は『イケてないグループ』なんだぞ。性格が良い奴と

付き合えればそれでいいじゃないか。贅沢だぞ建」

「嫌だ！ 俺は可愛い子と付き合いたいもん！」

ぶりっ子になる建ははつきり言って気持ち悪かった。建は口上手だから、上手く行けば彼女なんて

すぐ出来るとは思うのだが……。

建は顔が残念だからだろう。……元気があって良い奴だとは思っただけだな。

「悠斗は狙ってる女子はいないの？」

唐突な問いに少し俺は戸惑う。狙ってる女子、ねえ？

「俺は選ばない。というか選べる程俺はイケメンじゃないし。強いて言っならば……」

「言っならば……？」

「芳情優衣、とか？」

その名前に建はきよとした顔で俺を見た。

「芳情って……あの芳情？ いつも本ばかり読んでるあの根暗眼鏡ちゃん？」

建に罵られる芳情。芳情は別のクラスなのだがどうやって知り合ったかというと、彼女は図書委員で本が結構好きな俺（ライトノベル系が多いが）は図書室へ行くと断言してもいい程そこには芳情が居る。

いつの日か忘れたが、何気なく俺が芳情に話しかけて見た所、意

外にも話が弾んだ。

それから芳情と俺は友達になっているという訳。

「おいおい……根暗とか言うなよ。俺も良く図書室を利用するんだけど……話してみると楽しい奴だぞ？」

笑顔が可愛いし。ほら、人は見掛けによらないって言うじゃないか。ただ彼女はただ人見知りか激しいだけで

「ま、まあ好みは人それぞれだしな」

俺の話を遮り哀れむかのようにフォローを入れてくる建。何か芳情の話をしていたら図書室へ行きたく

なってきた。たぶん今の時間も図書室に居るだろう。よし！

「俺、ちよつと図書室行つて芳情の顔を見てくるわ」

「悠斗ー。襲うなよー」

下ネタ発言をした建を華麗にスルーして俺は教室から出て行つた。

俺の属する二年二組の教室から左に曲がって右の階段を登つていくと真正面に図書室がある。図書館に入ると やっぱり芳情が居た。隅っこの椅子に座りすっかり本に夢中になっている。

「芳情ー」

苗字を呼んでみた所、案の定芳情はぴくんと背筋を伸ばし、

「……………は、はい何でしょうか！？ ごめんなさい！」

「お、落ち着け、芳情。俺だ、木野悠斗」

芳情は気を取り戻したかのように息を吐いた。

「ふう……悠斗さんでしたかービックリさせないでくださいよー」

「いきなり謝り出す芳情に俺もビックリしたがな」

「じゃあ、お互い様って事で。エへへー……………」

静かに微笑む芳情は何というか……物凄く魅力的だった。

「芳情はもう昼飯、食べ終わったのか？」

「はい。私は二分でお弁当を空に出来ますよ。私の特技です」

「それもう人間業じゃねーだろ……芳情はいつも一人で図書室で食べるのか？」

「はい。私は悠斗さんとは違って……その……お友達がいないので」

悲しそくに顔を下に向ける芳情。俺もあんま友達は少ない方なんでしょう。

落ち込む表情よりお前は笑顔が似合ってるぞ。……そうだ！

「じゃあさ……俺と一緒に昼飯食わねーか？」

俺が提案するように言うと、芳情は顔を上げる。

「私と一緒にいいんですか？」

「良いと言っか寧ろ歓迎。皆で食べたほうが昼食が美味しく感じられるだろ。俺の他に建って言う奴も

誘ってさ。嫌、か？」

「全然ですよ！一緒に弁当を食べられるなんて私嬉しいですよ！はしゃぐ様に満面の笑みを浮かべる芳情。い、いかん。萌えてしまっ。

「じゃ、じゃあ明日、屋上で一緒に食べようぜ。どうせ芳情は図書館に居るだろ？」

俺図書室に誘いに来るからさ」

「あ、有難うございます。私頑張りますね」

昼飯を食うのに、何に頑張るんだ……芳情よ？

「あ、あと……もしよかったらいいんですけど……本当によかったですよ！」

語尾を大きな声で言う　　というか叫んでいる芳情。

「ん？……ああ」

「わ、わ、私の事は『優衣』と呼んでくだ　　」

「良いよ」

「は、はきゅ！？」

林檎のように顔を赤らめる芳情　じゃなかった優衣。

優衣も俺の事を『悠斗』って呼んでるからな。

優衣と俺は友達なんだから名前で呼ぶのが礼儀ってもんだよな。

「分かったよ　　優衣」

「！」

優衣は無言で本と弁当箱を持ち、早走りで図書室を出て行ってしまった。

ど、どうしたんだ？　トイレだろうか？

もしかして俺なんか悪い事言っただかな？

疑問に思いながら俺は自分の教室へ戻るのだった。

## 図書室にて（後書き）

誤字・脱字がある場合はすいませんが感想欄に書いていただくと嬉しいです。

後ここまで読んでくださり有難うございます！



閉鎖された空間（前書き）

毎日更新しようと思っていたのに無理だった（；；；）

## 閉鎖された空間

五時間目の子守唄共とれる英語の授業と比較的授業の中では好きな部類に入る数学も終わり今は  
放課後。

俺はバッグに筆箱だけ（教科書類は重いから机の中に置き弁）入れ、俺は建でも誘い一緒に帰ろうと思いつけようとして教室を見渡していた所、俺は声を掛けられた。

「ねえ……人手足りないんだ。手伝ってくれないか？」

ぱつちりとした黒い眼、長く伸びる清潔な黒髪。すらつと伸びた瘦身にきよにゆ……ごほん。が特徴のこの学校では美少女の類に位置する人である。

確か名前は……赤桐あかぎりれんげ連花れんげだっけ……？

男達からは『黒い一匹狼』とか言うあだ名を付けられていたような気がする。

あだ名の由来は確か男勝りで気が強そうだから、などの理由だった筈……。

彼女とは同じクラスだが、話した事は無い。今日が始めてだ。

俺は彼女が一人で居る所しか見た事が無かった。彼女自身、人とするものが嫌いなだけなんだろう。

そんな彼女が頼み事なんて……まあ俺が一番都合が良さそうだったからだと思っが。

「ああいいよ」

出来るだけ快く返事をした。

どうやら赤桐は俺の先生に旧図書室から資料を取ってきて欲しい、と頼まれたらしい。

成る程……赤桐を頼りにしているんだな。

旧図書室は、図書室の隣に位置している。旧図書室の中は何とも薄暗く埃臭さかった。

「赤桐……。その目的の資料は何処にあるんだ……？」

「……………」  
圧倒的無視！？ こちらを向こうともしないでせつせと資料を持ち出している。

あのお……これ俺じゃないんじゃないですか？ 何となく気まずい雰囲気が出る。

「重いから持ってくれ」

「はい！」

俺は力強く返事をする。兵隊か俺は！ 半ば涙目になりながらも赤桐から資料を受け取った……。その時だった。

ボタン！

擬音語にしてこんな音が鳴る。数秒経った後にそれが何の音が気付く。

ドアが閉鎖された音。

「……………」

「……………」

俺と赤桐に間にさつきより気まずい雰囲気が出た。何故か？

それはね……

このドアがオートロック式って事だよ 勿論内側からは開

けられない仕組み。アハハハッ

って笑い事じゃねええ！

落ち着け。落ち着くんた俺。

「あのお……赤桐。ど、どうしよう?」

「……………」

また無視!? ちょっと今はそれ所じゃないでしょ? 助け合わないところからは生還できない

んだよ! 今日夕飯、母さんが作った特製カレーなのに食べられなくなっちゃうよ!

「なあ……赤桐」

「……………」

「俺が嫌いでもいいから、とりあえず話そうぜ。な?」

「……………」

ん? ……何か赤桐が言葉を発しているが聞き取れない。

「怖いよ。助けてええ!」

え、えーと俺の聞き間違いだろうか? あの冷静な赤桐が発狂しているように見えるのだが。

「うええん。ひうくひつく」

ついには涙を流し泣き出す始末。何がどうなってるんだ? 既に

俺の頭の中もパニック状態だ。

「お、落ち着け。どうしたんだ赤桐、とりあえずハンカチを」

俺はハンカチをポケットから取り出し、涙を拭くよう赤桐に手渡そうと近寄るが、

「要らない! わ、私に近寄るな」

全力で拒否される。赤桐の顔は恐怖で竦み、怯えているように見て取れた。

「どうしたんだよ。確かに閉じこまれて怖いのは分かるけどさ」

「お、お前、私を強姦するつもりだろう!?!」

なにやらとんでもないワードが出たぞ。十七歳の女子が口にしてはならないワードランキング

二位ランクインの言葉が……。赤桐の顔は怯える様子で俺を見ている。

へへへ……ヤツちまうか！

「ッてするか！？　というか、俺にそんな事をする度胸は無い！」

俺はイケてないグループの属する人間だぜ……。そんな事出来る訳が……。

もしその行動を俺が実行した場合、俺はマスコミの的となり少年院行きだ。

「確かにお前イケてなさそうだからな。いかにも童貞そうだし」

「知ってたけども！　知ってたけども他人から言われるとキツイのがあるね！？」

何て嫌な奴なんだろうか？　こんなウザイ奴は二人目だ。ちなみに一人目は建。

「にしてもお前何で強姦なんて言葉を」

「こういうシチュエーションになると性に飢えた高校生男子共が私を陵辱」

「頼む……R　18指定になるからもうその話は中断してくれ」

「そうか？　まあそれは良いとして……。お前何て言う名前なんだ？」

「凄いですね。置いとける程、小さな話では無かったような気がします。」

「俺か？　……俺は木野悠斗。というか同じクラスなのに名前覚えられてなかったのか」

「だってお前イケてないじゃないか。目立たないし。地味だし。弱そうだし。」

「うう……それはそうだけど……」

赤桐は人が気にしてないまでも酷い事を言いまくる奴だと俺は認識を改めよう。

まあ会話を交わしてみると、変態的単語など俺への悪口を多様していたが、赤桐は俺が勝手に思い描いていた赤桐とは違っていた。やはり優衣と一緒に、話してみないと分からない。

見かけを見ると謙遜しがちだが、中身は違うという事を思い知らされる。

時間はあっという間に経った。というか時計が無いので性格の時間も不明だったが、結構な時間は

赤桐との会話で潰れた。

すると俺の腹の音が鳴る。たぶん今頃は七時なのだろう。

「あー……腹減ったなー連花の事食べていいか？」

「私も腹が減って悠斗の肉を呼ばれる部分を全て焼いてしまいたい位だ」

「俺のボケはスルーで、お前が言ってるのは俺の惨殺死刑じゃねーか。」

短い時間で、俺と連花は名前前で呼ぶ仲まで成長していた。

連花の笑顔は教室ではみることができなかつたので俺は嬉しい気分になった。

それにしても……何時間経ったのだろうか？ お腹がさつきから鳴りまくっているのだから

七時は過ぎだだろう。それにしても……。

「寒いな」

「確かにこの寒さは人知の域を超えてる」

いやいや人知の域を超えたら死ぬよ、と心の中でツツコミを入れた。

初春なのかまだ冬の名残があつて少々肌寒かった。連花も肩を震わせているからかなりの寒がりなのかもしれない。すると連花は盛大にくしゃみをした。

「大丈夫か連花。……とりあえずこれ着ろよ」

俺は制服を脱いで連花の背中に乗せる。俺はYシャツ姿になったが、俺は男だ。これ位へっちゃらだ。……本当は寒いけど。

「……いいのか？ それだと悠斗が寒いのではないか？」  
心配そうに俺の顔をのぞきこむ連花。

「大丈夫。全然寒くない！ それに馬鹿は風邪引かないって言うだろ！」

「し、しかしだな……」  
かたくなに拒む連花。

「あ……。俺の好意なんだから遠慮すんなって……」  
「私への好意なのか？ で、では有り難く受け取ろう」

ん？ さつきはあんなに拒否してたのに、こつもあつさり受け取るとは。やはり寒かつたにちがいない。

「なあ連花。顔が赤いぞ。風邪引いたのか？」

「べ、別にそんなんじゃない！ そ、その、……えーい！ 五月蠅い！」

身をジタバタする連花は普通に可愛かった。普段教室で見るとな連花とは全然違う。

ま、まさかこれがギャップと言うのだろうか。俗に言われる『ギャップ萌え』。

……すると前方でドアの開閉音がした。……え？

「ゆ、悠斗さん。ここで何をしてるんでしょうか？」  
そこには芳情兼メシア（救世主）が立っていた。

## 閉鎖された空間（後書き）

二人目のヒロインが登場。

すいません。読者の方に質問なのですが、

『展開』が急かどうか教えてください。よろしくお願いいたします。



家でのちやっと(前書き)

なんとか投稿……ガクッ

か、感想をください。

## 家でのおちゃっと

何故優衣が旧図書室にやってきてくれたのか。その理由。優衣はいつも図書室で委員会の

雑務をしているらしい。で優衣が帰る時に旧図書室（図書室の隣にある）の所から俺の声がある。

聞こえてきたので、結衣は旧図書室の扉を開けてくれたんだと。正直優衣には感謝した。ありがたや。

「サンキュー、優衣。お前には感謝してもしきれない位だ。ありがとうな優衣」

すると、優衣は俺の言葉をスルーして俺の左を指差した。

「……その女性は誰でしょうか、悠斗さん」

「ああ、えーと、こいつは同じクラスの同級生で赤桐連花って言うんだ。まあ色々事情があつてな

こんな状況に……」

・・・

「……ただの同級生ですか。それなら良かったです」

結衣は安心したように息を漏らす。

ん？ 妙に言葉に刺があるような？ するとさっきから黙っていた連花が言った。

「お前は誰だ？ 私の悠斗に何かようか？」

「……！ 私は芳情優衣です。誰が『私の悠斗』ですか……前言撤回してください。悠斗さんに失礼です」

あれ……？ 何かいつもの優衣じゃない？ 何か眼が怖いですよ、優衣さん。

誰かを殺しそうな眼ですよ？ すると連花は意地悪そうな笑みを浮かべ、

「お前は、私に悠斗を盗られたから嫉妬してるのか？ 嫉妬は女の性だから仕方が無いか」

「ちょ、ちよつと、連花。何言ってるかさっぱり……」

「絶対あなたには負けません！」

結衣はいつもの落ち着いた雰囲気から一変させ、大声で叫ぶと旧図書室から出て行ってしまった。

ど、どうしたんだよ。一体？

「なあ連花。何で優衣は怒ってるんだ？ 教えてくれないか？」

「別に。悠斗が知らなくて井居事だよ」

そう言っている間も薄ら笑いを浮かべていた連花だった。

「ただいまー」

「ああおかえりー今日は遅かったわねー。まさか彼女が出来たのー？」

「ちげえよ。少し厄介事に巻き込まれちまってな」

俺に彼女なんか出来るわけねーよ。女は星の数居るって言うけど俺には一つの星も分けてくれないのですね。神様爆発しろ。

俺は母親が持ってきてくれたカレーを掻き込み、『ごちそうさま』と言うと自分の部屋へと戻った。

自分の部屋はアニメのポスターなど、数十冊に値するライトノベルなどが置いてある。

俺はノートパソコンを起動させインターネットへと繋ぐ。お気に入りから『高校生チャット』というサイトにとんだ。俺は指定された所である人物と二人チャットする約束をしているのだ。

すると『k i r a r a 』さんと名前が付いた人が現れた。

『k i r a r a 』>こんにちあ(#^・^#) Y U U T O さんですよ?」

『Y U U T O 』>そうだよ。。。あのオタクのY U U T O だよー W W 』

俺は自分の悠斗から『Y U U T O 』にしている。

『k i r a r a 』>『Y U U T O 』さんー。今日また私告られちゃいましたあ W W W 』

そう。kiraraさんは現実で凄いもてる……らしい。ネットだから信憑性はわからないが

疑ってはきりが無いので、俺はkiraraさんを信用している。kiraraさんのわかっていている情報は俺と同じ東京に住んでいて性別が女ということ。

『YUTO』>羨ましいですね。俺は全然、モテないんですよー  
( ; ; ; )

『kirara』>そうですかー？ 案外『YUTO』さんは楽しい人だからモテるんじゃないですかあ？

『YUTO』>何言ってるんすか。俺は『イケてないグループ』に属している人間ですよー。

友達もあんまないし……顔は何処にでもいるような顔してるし。駄目だらけwww

『kirara』>私は超イケてますよwww  
『YUTO』>そう言うと凄い嘘っぱいなwww

そんな感じで圧倒言う間に三時間が過ぎた。kiraraさんと話していると飽きない。

……やっぱり俺とは話術が違う。やはり友達と話慣れているのだろっか？

『YUTO』>じゃあkiraraさん。俺もう寝ますね。今日色々あって、眠いんす(。\_。)。zzz…

『kirara』>えー……私もつと『YUTO』さんと話してたいなあー

『YUTO』>すみませんー。じゃあおちます。ノシ  
『kirara』>バイバイ( ^o^ )ノ

ああ……肩こった。しかもねみい……。早く寝るか。

俺は電気を消して横たわるとすぐに眠りに誘われた。

家でのちゅっと(後書き)

伏線張り完了}

ばらしてよかったのか？

## 地味ーズ達のバスケット【前編】

二時間目終了後の教室。

あー……眠いな……。俺は盛大に欠伸あくびをかました。

一時間目英語、二時間目数学と正直面倒な授業を睡眠で終わらせ、三、四時間ぶつ通しで体育。

体育の授業内容は『バスケット』だと。正直俺にはどうでもいいが。

俺は体操着に着替え、一人で体育館へ向かっていた。

今日の体育は二年男女全員、つまり五クラス（約百人）で総動員でバスケット。

男子、女子で半コート。……暇になったら、優衣の所にも行くかな。

体育館に着くと、ほとんどの二年生が集まっていた。……人口密度高いな。

活発な男子とバスケット部の男子、女子がフリースローをしていた。そして。

「おい！ 女子は左のコート、男子は右にコートに並べー！」

むさ苦しい体育教師の安藤が大声をあげる。女子の方でも女体育教師の斉藤が安藤と同じように声を荒らげた。俺は右のコートの所へ駆け足で進んだ。……安藤と斉藤が同棲しているという噂があるのだが、

それは省略。そして男子全員が集まった所で。

「今日はトーナメント方式でやるぞ！ 勝った奴には俺の抱擁……！」

か。……いらねーよ。誰も望んでねーよ。ある意味罰ゲームじゃねーか。

「というのは冗談で優勝したチームには、学食のプリンを無料で全員に提供しよう」

その提案にクラスの男連中は歓声があがった。学食のプリンに限  
定十個なのだが……。

超美味しい……らしい。思わず感涙するほど。 建談。

発売されて二分で全て無くなる。

そんな人気だったらもつと増やせよ、プリン。俺まだ一度も食っ  
た事ないんだからさ。

「 さあ！ 早くチームを作れ、野郎共！ 散れ！」  
というわけで。

男子連中がチームを作る為、うるつき始めた。男連中は目をギラ  
つかせ人を選んでいる。

そ、そこまで美味しいのか、そのプリンは？ なんか食いたくな  
ってくるな。

俺は建と佐藤と田中そして山田とチームを組み、通称『地味ーズ』  
を結成した。

取り敢えず……一勝はしたいな。  
優勝するには五勝するしか無い。

「お、おい……あれ見ろ、悠斗！」

建が恐れおののく声を出し、指を差した。そこには……。げ。

あの赤城真率あかぎしんいるチーム。赤城真とは中学時代になんと関東大会  
で準優勝を果たすのに

貢献した男……と聞いている。これも噂情報である。

「おい……絶対勝てないだろ」

「だな」

「はあ……」

山田、田中、佐藤から諦めの呟きが出ている。

まあ……一勝出来ればいいよな。

「よし！ 全員チームを組んだな？ ……では今からトーナメン  
ト表を書くぞ」

そして安藤は粗い字で書き始めた。

俺のチームは二試合目から。

暇なので一人で体育館の隅でちょこんと座っている優衣を見つけたので話しかけた。

「よっ！ 優衣！」

「あ。悠斗さん。こんにちは……」

顔をあげ小さい声で言う優衣。ん。元気ないな。取り敢えず俺は優衣の横に座った。

「どうしたんだ？ 優衣？ 元気無いみたいだけど？」

「悠斗さん、私は一体どうすればいいんでしょうか？」

俺が『何が』と訊くと優衣は重々しく言った。

「赤桐さんと同じチームなのですが……赤桐さんが私にいつも変な笑みを浮かべてきます。怖くて

怖くて……」

「誰が怖いって？」

この言葉は俺ではなく連花だった。後ろを向くと威風堂々と連花が立っていた。

体操着から溢れるように胸が……。Eはあるだろうか？

ってイカンイカン。煩惱よ、消え去れ。

「……別になんでもありません。私は『悠斗』さんと話してるんです。あなたに言う必要はありません」

「へー……。私が『悠斗』と話す困る事でもあるのかな、優衣ちゃんー？」

ちょ、何か二人の間に雷鳴が轟いているのですが……？

意地悪そうな笑みを浮かべている連花と明らかに不機嫌になった優衣。

あ！ 分かった。二人は、『犬猿の仲』なのだろう。

だとしたら俺が今する事と言えば

「じゃ、じゃあ、俺はもうそろそろ試合が……」

「はい！ 頑張ってくださいね、悠斗さん！」

「頑張れよ、悠斗。心ながら応援してるぞ」



逃げよう。俺は優衣と連花の戦闘区から脱出。 ミッションコ  
ンプリート。

本来バスケットは十分を一ピリオドで四回、計四十分なのだが、それ  
だと長いから

五分を一ピリオドとし二回、十分で終わる。

というか四十分も帰宅部の俺が動ける訳がない。いつか倒れる。

「悠斗。俺達の試合だ！ 行くぞ！」

「おう」

まあ……地味ーズは地味なりに頑張りますかね。

終わりのホイッスルが鳴った。結果は四七対三二。俺達「地味ー  
ズ」の勝利。

俺と建のツートップでパスを繋ぎ点を決める。見事にスイスイと  
進んだ。

DFも田中達三人が頑張ってくれたお陰でなんとか勝てた。

ふう……久しぶりに汗をかいたな……。俺は不意に女子のコートを  
見てみると……。

優衣と連花のチームが戦っていた……というか戦っているのか？

優衣はオロオロとしていて連花と言えばーとしている。

連花……やる気ねえだろ。他の三人が頑張っていたが結局八〇対  
十二というスコアで負けた。

うん、優衣はともかく連花をチームにいれたのが間違이었다よ  
うだな。

そう思い俺は疲労からぺたりと座り込んだ。

地味ーズ達のバスケ【前編】（後書き）

更新遅くなってすみません！

後編は出来れば今日中に仕上げたいとおもいますので！

感想をもらえば、執筆の励みになりますので、よろしくお願いします。  
す。

健の許婚！？（前書き）

……何故、地味ーズ達のバスケの後編がないかと申し上げますと、活動報告に全て書いておきました。ご一読を。

時間軸は、五月のはじめあたりです。

健の許婚！？

「じゃあな、悠斗ー！ また明日ー」

「おう。また明日！」

悠斗は去っていくと同時に俺は自分への道筋を歩き出した。

夕焼けに染まる空の下を歩く俺。

今日も充実した日々だった。親友の悠斗と一緒に雑談してる時が一番、楽しい感じがする。

その時だった。俺の横をフェラーリが通過し、俺の五メートル先位で止まった。

フェラーリから降りてきたのは……俺のメイドの三谷由里香だ。

「健様。お入り下さい」

「いいよ。今日は歩いて帰りたいから」

「いえ、今日は夜奈御嬢様がいらっしゃいますので」

「……そうか」

俺は由里香さんに、連れられ車に入る。

社内には俺と由里香さん以外に、十人以外にも人が沢山いる。

「夜奈が来てるの？」

「はい、夜奈様と夜奈様の母親の代月様よつき。そして健様の父親の重三郎様が。」

そして今日は四人での食事会と」

「俺は席を外して」

「駄目です」

「ですよー」

俺と由里さんとやり取りを交わす内に、俺の家へと到着。

家というよりかは 豪邸だろう。

百坪を超える庭。中心に堂々と起つのは俺の父親 吉河健三郎

の像。

背景に起つのは豪邸。

吉河グループ。それは外資系産業を中心に栄える企業。

年商2兆。資産は100兆越え、俺は社長、健三郎の息子。

……ここまで家も大きいことから、内部も大きい。

自室へ戻るのも苦勞する。

俺は自室への扉を開けて、部屋に入

ったら、そこには着替え中の、

「け、健さん。え、えつとこれは？」

女性がいた。彼女の表情全体が、薄っすらと、桃色になるのが分かる。

大和撫子という言葉がぴったりと合う彼女。華奢の腕で下着を隠す。

端正な顔立ちが、虚を突かれたように俺を見据えている。

俺は思い切り、扉を閉めた。

「ごめん。俺が絶大的に悪かった」

「い、いえ、大丈夫ですよ。私の体で健さんが満足出来るのなら」

此処は、『何見てんのよッ変態ー！』『辞めてくれーッ！』位に、

俺の額にバットが直撃してもいい場面で言う彼女。

暫くすると部屋内から、『入っても良いですよ』という声が聞こえたので、

入室。

夜奈は俺と一歳年下で、十五歳。現在中学三年生で、

私立の女子中学校に通っている。

その私立が月に百万もするから驚きだ。

彼女のまた、ファッション経営でアメリカを中心に栄える南城グループの御嬢様だから。

「えーと、何故俺の部屋で着替えてたの

夜奈」

「母様が健さんの部屋で着替えてなさい、と仰ったので」

「あーそうか」

風呂場とかで着替える、とは敢えて言わなかった。ここでいうと御免なさい、を100回位連呼されそうだからだ。

「け、健さん」

「ん、どうした？」

「分からない数学の問題があるんです。二次関数なのですが」

「あ、教えてやるよ」

「有難う御座います。ずっとわからなかったんです」

夜奈は、勉強熱心な女の子で、中学生になつてから、彼女は、俺にわからない問題があつたら、聞きにくるのだ。

「で、このXを代入して　　ってそういえば。」

夜奈は、何で勉強なんかしてるの？　別に夜奈は勉強しなくてもいいじゃん」

別に、彼女はエスカレーター式の人生の筈だからだ。

「えっと、二つ理由があります。まずは、勉学の向上。」

そして、

「そこでまた顔を赤らめる夜奈。」

「教えませんっ」

「えー……」

彼女がこんなにも口を閉ざす理由はきっと大事なことなのだろう。俺は特に聞いただしもせず、夜奈に問題を教えていた。

ひと段落した所で、夜奈が、

「あ、健さん。七時になりましたら、大広間へと、いらっしやっつて下さい。」

母様と食事をなさるそうなので」

「分かった」

慣れないスーツに着替え終わった俺は大広間へ行くと、そこには父さん。向かい合わせに

夜奈と夜奈の母が座っている。

そして、俺が父さんの横に座った。父さんが、

「今日はお忙しい所有難う御座います。代月様」

「いえー、大丈夫ですよー今日は、食事会の為に一日開けたんですよー」

おっとりとした口調で言う、夜奈のお母さんの代月さん。

ぱっと見、二十代にしか見えないが、なんと三十路らしい。

「それでは、頂きましょう」

三ツ星レストランのシェフをわざわざ、家に呼び込んだらしい。

机を埋め尽くす、料理の数々。それを食しながら、父さんが、

「今日、御二方をお呼びしたのは」

そこから先は俺にはスローモーションで流れていく。

.....

「夜奈さんと健の許婚の件で」

「

健の許婚！？（後書き）

えーと、前回の更新は9月11日で今日は12月17日……？  
三ヶ月も放置してすいませんでした！><



## 健と夜奈と約束と？

……たぶん、これは夢だ。

ふわふわ、とした感覚で俺は夢の浮遊感で、ある男の子を見ている。

街外れの公園。夕暮れ時の閑散とした雰囲気の中、ブランコに座り、そこでその男の子は泣いていた。

誰も慰めようとはせず。

ただただ、涙を流しているだけ。

一瞬で判る。アイツは俺の過去。たぶん、あの時は、ある大事なモノを失くしてしまったから泣いているんだろう。そこへだ。

ある上品な女の子が俺の元へやってくる。

その女の子は慰めるように優しく俺の髪を撫で、

「どうしたのですか、健さん。御帰宅が遅いということ、健さんの父上様が心配しておられましたよ」

そして女の子　夜奈が俺にハンカチを差し出したので受け取り、涙を拭いている。落ち着いた所で、

「……僕が、夜奈ちゃんから貰った、マフラーを失くしちゃって……ごめんね、夜奈ちゃん」

俺は小学校の友達に夜奈が一週間も賭けて編んでくれた、マフラーを見せびらかそうとしたのだ。

貰った時には感謝仕切れないほど、嬉しかったのだ。

「そんな事ですか。大丈夫ですよ、健さん。また編んであげますから」

「許してくれるの？」

そして薄っすらと笑みを浮かべる夜奈。

「何仰ってるんですか、健さん。貴方も私が困った時に助けに来てじゃないですか。」

料理で私が健さんに作ってあげた時も砂糖と塩を間違えたケーキを『美味しいよ、夜奈』って食べてくれたり、根気良く勉強を教えてくれたりするじゃないですか。御相子です　　ですが」

今度は薄桃色に頬を染める夜奈。目を背け、言い辛そうに、

「　　そ、それでも、健さんがいたたまれないのでしたら、私の言う事を一つ聞いてください」

「うん、夜奈のお願いだったら、僕何でも聞くよ」

「わ、私と」

「

「　　起きろ、健！」

悠斗の怒声により、起きた俺。悠斗が、

「授業中、ずっと寝やがって。　　っにしても、朝から元気無いみたいだが、どうした？」

『いやー幼馴染と許婚ができちゃって』とは口が裂けても言えない。

「　　仕方ねえから、お前の方も日本史の授業、写しといたよ」

「有難よ、親友」

優しすぎる。この悠斗の優しさは親友として詐欺に引っ掛かるのでは無いか、と

少し心配になる。ちなみに、悠斗にはまだ、俺が吉河グループの御曹司なのはまだ秘密だ。

時期が来たら、全て話す。……今はまだ、な。

「だるいんだったら、保健室行って来い」

「いや、大丈夫だよ。」

なあ、悠斗

「ん？ どうした？」

「もしも、本当にもしもだけど、俺に許婚が出来たとしたら、どうする？」

「……ありえねえーっ」

「仮説だよ、かーせーつー！」

「はいはい。許婚つつーと、親が勝手に男女の結婚を決める、だつたっけ？」

「まあ、合ってる」

「俺はたぶん、相思相愛じゃねえと、結婚とかしないけどな。親が決めた事でも全力で反対すると思う。……まあ、一生付き合うパートナーだし、大事に決めなきゃいけない、っというか」

「……まあ正論だよな」

「まあ、自分が好きで、相手が嫌々だったら、大人しく引き下がるしかないよなっていうのが俺の意見」

「………ありがとう、悠斗。らしくない俺の話しに付き合ってくれて」

「本当に今日は健らしくねえな。偽者じゃないか？」

「俺は本物の健だよ。世界に二人も健は要らない」

「あ、いつもの健に戻った」

この時、俺は悠斗とは一生親友でいたい、と切なる願いで思った。取り敢えず、夜奈の気持ちを最優先に考えよう、と心に決めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4653n/>

---

木野悠斗の日常

2010年12月29日22時11分発行